

平成24年5月31日

第一回検証会議にあたって

全国B型肝炎訴訟原告団 梁井 朱美

全国B型肝炎訴訟原告団の梁井と申します。

私がB型肝炎に感染しているのがわかったのは昭和58年の長女を妊娠中の血液検査でした。3人の子供に恵まれ、3人とも感染防止対策がとられました。残念ながら二人の娘はB型肝炎に感染してしまいました。たいした知識も持たない私は「他の人に移さないように」とおっしゃった産婦人科の先生の言葉だけを思っただけで子供を育ててきました。そしてB型肝炎は私たち親子3人だけの問題だとずーっと思ってきました。なぜ肝炎に感染したのか考えた事もなく、ただ運が悪かったんだと自分に言い聞かせ、娘達には本当に申し訳ないと思ってきました。

その後、私は慢性肝炎を発症し抗ウイルス薬を服用しはじめました。2ヶ月ごとの通院で支払う医療費は私にとっては高額で、同じ道を辿るかもしれない娘達の負担を心配しました。しかしそれよりもこの抗ウイルス薬には催奇性が疑われ、薬の服用をためらっておられる若い方々の話を伺った時、なんと恐ろしい病気を私は娘達に感染させたのかと肝炎に対する自分の認識の甘さにまた自分を責めました。

そんな中、集団予防接種における注射器の連続使用により、B型肝炎患者が発生・拡大したことについての国の責任を明確にして、肝炎患者が安心して治療を受けられ、また安心して暮らせる社会を作るためにB型肝炎訴訟が始まる事を知りました。娘達のためになるなら母親としてどんな事でもやろうと思ひ、私は提訴に加わりました。

そして、多くの原告の方々のお話を伺い、私は被害の深刻さ甚大さに驚きました。特に私と同じように、子ども達にB型肝炎を感染させた母親の悲しみや不安・苦しみを聞くと、涙が止まりませんでした。

私のB型肝炎は予防接種が原因だと国は認めましたが、自分がなぜ肝炎に感染したのかも知らないまま、ただ子ども達に肝炎を感染させて申し訳ない自分を責め続け、肝ガンで亡くなられたお母さまの事を私は忘れる事ができません。

なぜ、40年間も注射針筒の連続使用が放置され続けたのか。そのためどれだけの人が肝炎で苦しむ亡くなっていったのか、また現在どれだけの人が苦しむ不安の中で生きているのか。この検討会で明らかになって欲しいと思います。また、このような悲惨な事が繰り返される事は決してあってはならない事です。この検討会で、再発防止のシステムが構築される事を願います。

よろしく願いいたします。